

# 「前方後円墳の終焉」から見た胸肩君

小嶋 篤

## はじめに

故其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之奥津宮。次市寸嶋比賣命者、坐胸形之中津宮。次田寸津比賣命者、坐胸形之邊津宮。此三柱神者、胸形君等之以伊都久三前大神者也。

(『古事記』上卷)

是時、天照大神勅曰「原其物根、則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也。故、彼五男神、悉是吾兒。」乃取而子養焉。又勅曰「其十握劍者、是素戔嗚尊物也。故、此三女神、悉是爾兒。」便授之素戔嗚尊、此則筑紫胸肩君等所祭神是也。

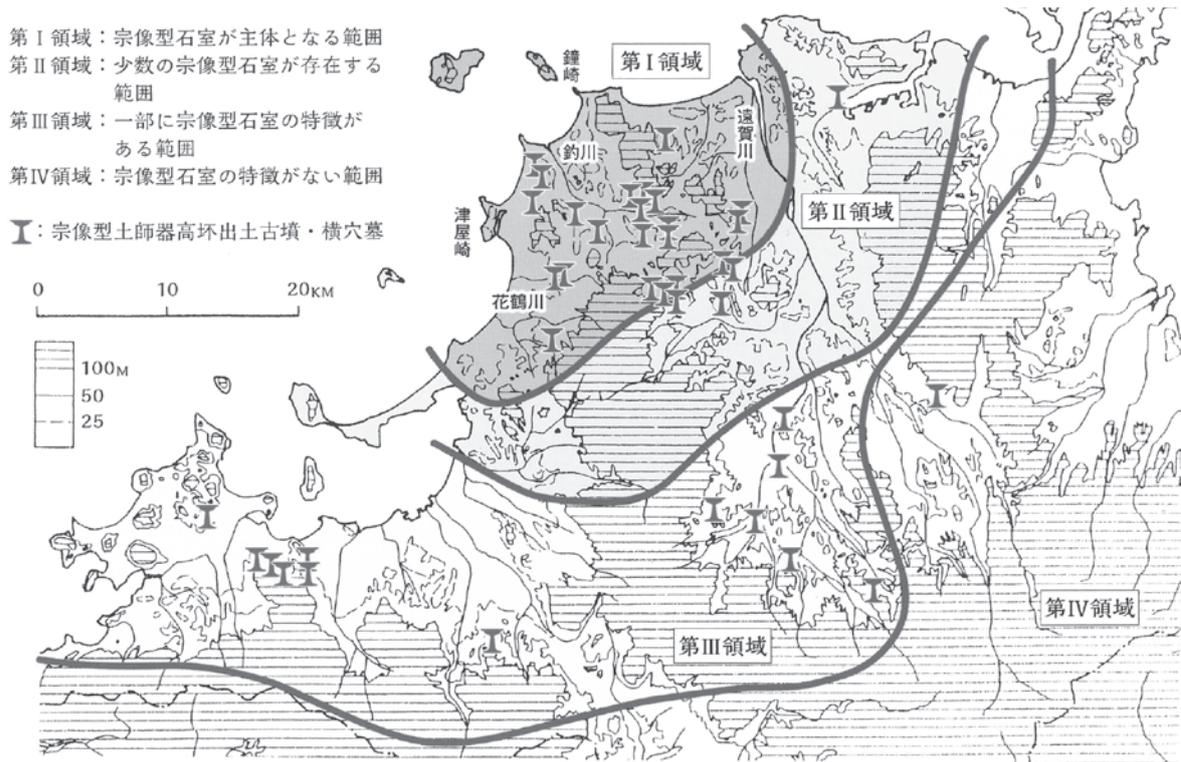
(『日本書紀』卷第一 神代上)

現存する日本最古の文献史料『古事記』・『日本書紀』によると、胸形君・筑紫胸肩君は宗像三女神を奉る一族として記されており、その初出記事から宗像三女神との分かち難い関係が窺える<sup>1)</sup>。筆者はかつて「墓制と領域・胸肩君一族の足跡」と題した拙稿を記し、宗像三女神を奉る胸肩君の活動領域について考古資料から論証を試みた(図一・二)(小嶋二〇〇九・二〇一一)。その成果は、その後の考古学(岩石学的分析含む)・文献史学による批判検証がなされ、胸肩君についての新たな研究素材として取

り扱われはじめている(井浦二〇一三・二〇一七、井浦他二〇一五、大高二〇一七、池ノ上二〇一八)。本稿は拙稿以後の研究動向もふまえた上で、胸肩君のさらなる実態解明を目指すものである。まずは、胸肩君の活動領域に関する近年の研究成果を概観し、具体的な研究課題を明らかにする。

## 一、胸肩君と宗形郡

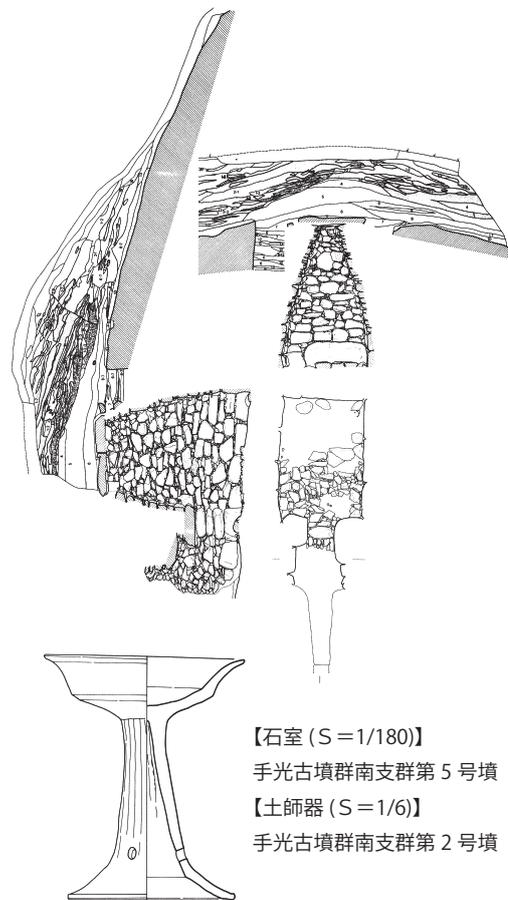
『古事記』、『日本書紀』が完成した奈良時代。胸形君・筑紫胸肩君の後裔氏族である宗形朝臣は、大宰府管内唯一の神郡・宗形郡の郡司・神主を歴任する地方官人として確固たる地位を築いていた(亀井一九九九a・b・二〇一一)。この宗形郡の地理的範囲は、木下良氏や大高広和氏らによる『和名類聚抄』記載の郷名駅名考証により、具体的に示された(図三)(木下一九九九、大高二〇一七)。その成果に基づくと、古代の宗形郡の範囲は、近世以降の宗像郡よりも範囲が広く、「現在の宗像市・福津市に加え古賀市と新宮町まで含む」(大高二〇一七)。大高氏も検証したように、この宗形郡の範囲は、拙稿で提示した「胸肩君と同一墓制の集団が居住した



図一 宗像型石室の分布域と宗像型土師器高坏の分布 (小嶋 2012・2017a)



図三 古代宗像郡の地形と範囲 (大高 2017)



図二 宗像型石室と宗像型土師器高坏

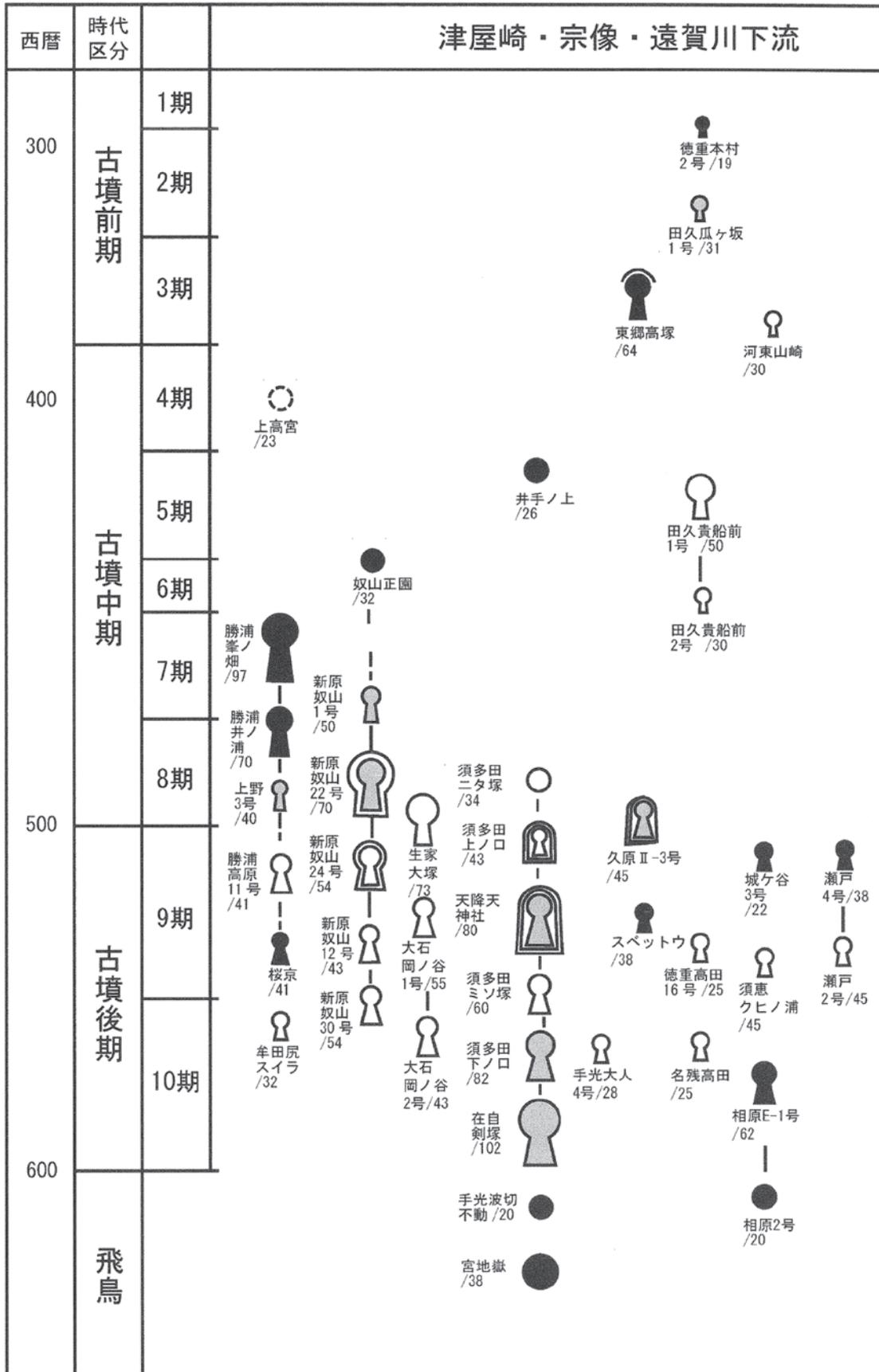
領域（第Ⅰ領域）とほぼ重なる（小嶋二〇一二）。つまり、考古学と文献史学という異なるアプローチから、「律令国家が宗形郡（評）を設定する際に、胸肩君（宗形朝臣）の領域を踏襲的に編成していた」との結論が導き出された（小嶋二〇一六b・大高二〇一七）。そして、考古資料に基づくと、胸肩君の領域は、古墳時代後期には複数の資料（古墳築造技術・葬送儀礼・石材輸送等）から論証可能な状況にあり、古墳時代中期についても大型前方後円墳（首長墓系列）等からその存在が作業仮説として提示できる（井浦二〇一七、池ノ上二〇一八、小嶋二〇一二、重藤二〇一一、篠川二〇一三、花田二〇一二）。

語弊がないように補足すると、筆者が分析結果から提示した領域とは、具体的には胸肩君の服属集団「胸肩部」（後の宗形部）の主要な居住範囲を意図している。胸肩君の支配とは血縁集団に根差したものであり、地理上の領域支配を直接的には形成してはならず、領域内には胸肩君に服属していない豪族も複数存在していたと想定できる。とくに、宗像中枢から離れた花鶴川流域や遠賀川流域では、その傾向は高かったと考えられる。また、主要な居住範囲を外れて、飛び地的に胸肩部が存在したことも想定できる。時期差はあるが、「大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍」に宗形部宿奈売・宗形部阿比太売、『続日本紀』に宗形部堅牛（御笠郡大領）の名が見え、大宝二年（七〇二年）の嶋郡と和銅二年（七〇九年）の御笠郡に宗形部の居住が認められる<sup>20</sup>。これらの居住が古墳時代までさかのぼり得るかは、考古学を含めた追検証が求められる。その追検証の一端は、すでに発表しており、今津湾沿岸に宗像型石室が分布する点や、福岡平野内の限られた

墓域に宗像型石室が見られる点等の複数の分析結果を提示している（小嶋二〇一二・二〇一七b）。将来的には古墳資料以外からの検証も求められるが、単なる推論ではなく、仮説としての検証に耐え得る情報が出揃いつつあると考えている。

以上のように、宗像三女神を奉る胸肩君の領域は、複数の考古資料・文献史料と別個の研究手法により、相互検証を経た研究成果が着実に積み上げられている。とくに、律令制下における宗形郡の範囲が、近世期の裏糟屋郡を含むとの考証の意義は大きく、筑紫君葛子が献上した「糟屋屯倉」の研究とも直結する（井浦二〇一七、大高二〇一七、木下一九九九）。大高氏は「近年では近世以降の宗像郡が宗像地域であるというイメージが一般のみならず研究者間にも浸透してしまい、鹿部山に隣接する鹿部田淵遺跡や、隣接する馬具埋納坑の発見で注目を浴びる古賀市谷山の船原古墳など、古賀地域の重要遺跡について宗像地域や宗像氏との関係が十分に顧みられていない現状がある」との危惧を提示しており、筆者も同意見である（大高二〇一七）。九州北部の首長墓系列を整理した重藤輝行氏も、「津屋崎古墳群と糟屋平野の間の地域では、古墳時代の各時期を通じて大型墳の継続的築造が認められない。津屋崎古墳群の首長層、ひいては宗像君の生産基盤を考える場合には首長系列の変動に加えて、釣川流域はもちろん、遠賀川河口から糟屋郡北部地域までの広い範囲を対象とする必要がある」と述べており、やはり同様の見解を述べる（重藤二〇一一）。

本稿では、これらの研究動向に鑑みた上で、古代の宗形郡の範囲とも関係する、古墳時代から飛鳥・奈良時代への過渡期に生じた「前方後円墳の



※黒塗りは時期を限定できるもの、灰色は時期が前後する可能性のあるもの、白抜きは時期決定の根拠の弱いもの。古墳名の後の数字は墳裾を基準とした全長ないし直径を示す。

図四 宗像地域の首長墓系列（重藤 2011・篠川 2013 より引用、一部改変）

終焉」の様相から胸肩君を検討する(図四)。なお、以下で宗像地域と記す範囲は、上述した古代の宗形郡の範囲であり、現在の宗像市・福津市・古賀市・新宮町の行政範囲とおおむね重なる。

## 二、胸肩君の墓域

### (一) 宗像地域の終末期古墳

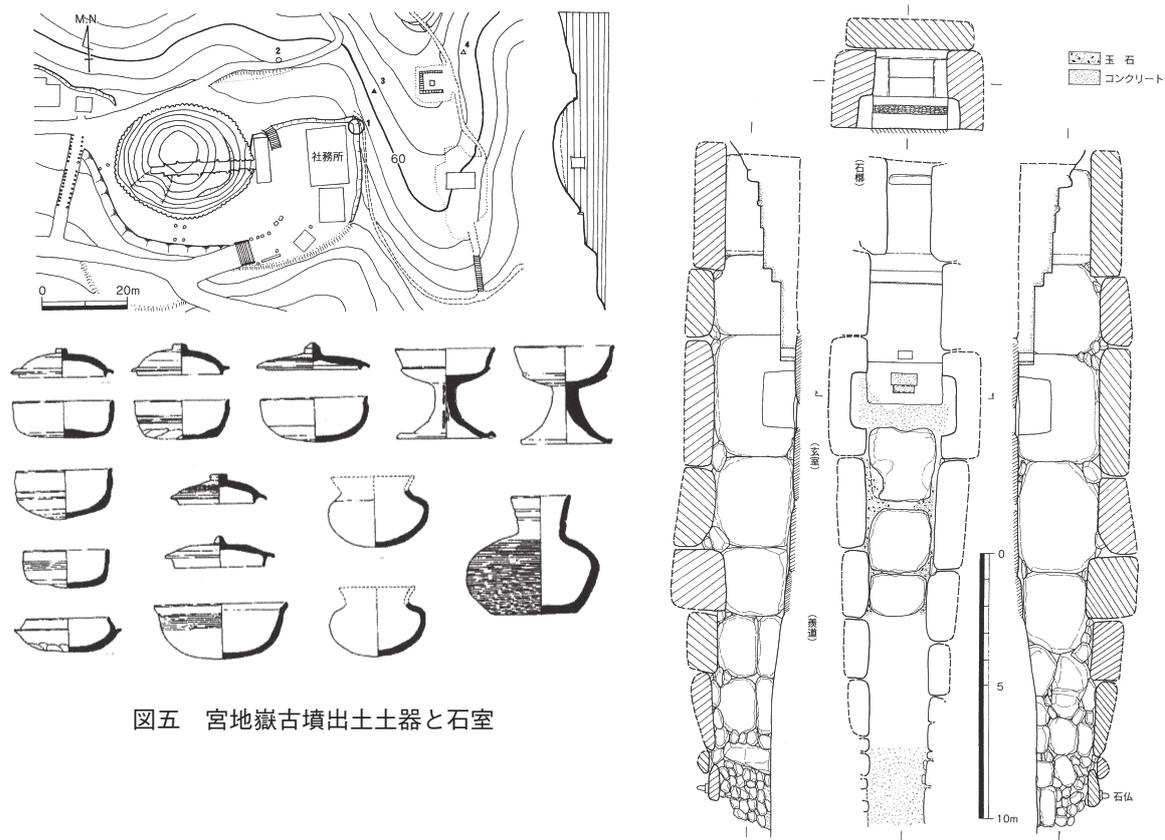
個人名が識別できる最古の胸肩君は、「胸形君徳善」である。胸形君徳善は、『日本書紀』卷二八の天武天皇即位式の記事にて記載され、天武天皇の長子、高市皇子の外祖父であることが明らかにされている。この胸形君徳善の墓所として有力視されているのが、現在の福津市に所在する宮地嶽古墳である。

宮地嶽古墳は、横口式石槨系の長大な横穴式石室を主体部とする古墳である(図五)。墳裾は二次的な削平により消失しており、正確な墳形や墳丘規模は不明であるが、現状の地形から直径三四m前後の円墳と把握されている<sup>③</sup>。出土須恵器に小田ⅣA期(TK209型式期)以前の須恵器が含まれないことから、七世紀中頃の造営が想定されている。全長約二二mの長大な横穴式石室と副葬品として納められた巨大な金銅装頭椎大刀、金銅製馬具、ガラス板等の存在は、宗像地域の有力首長が葬られたことを示している。その被葬者に胸肩君の族長を想定することに異議はない。豪華な副葬品もさることながら、造墓の視点から眺めると、巨石を山の中腹まで引き上げる作業には、相当な労働力の確保が必要なことは容易に想定

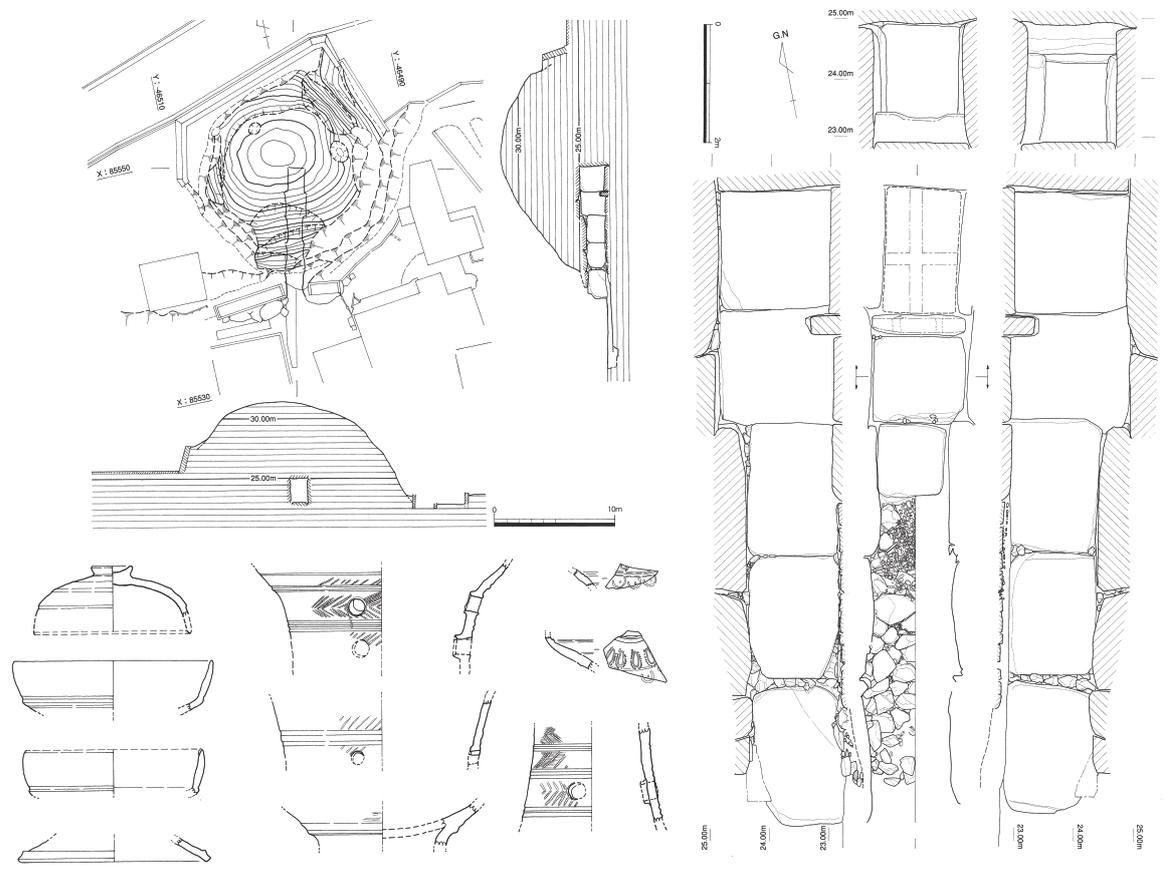
できる。

この宮地嶽古墳と同様の横口式石槨系石室を内部主体とする古墳が、同じ福津市に所在する手光波切不動古墳である(図六)。手光波切不動古墳は二〇一〇年にはじめて発掘調査が実施され、古墳築造時期について、石室構造・石材・須恵器・馬具から最新の見解が示された(井浦二〇一三)。調査担当者の井浦一氏の見解に基づく、手光波切不動古墳の石室は六世紀末のシシヨツカ古墳(大阪府)を最古例とする石室系横口式石槨の影響で成立し、出土遺物等の総合的な調査成果から、築造及び初葬の年代は七世紀前半(小田ⅣA期)と考えられる(井浦二〇一三)<sup>④</sup>。つまり、従来想定されていた「宮地嶽古墳↓手光波切不動古墳」ではなく、「手光波切不動古墳↓宮地嶽古墳」という変遷に、より具体的な論拠が提示されたことになる(下原二〇一六)。なお、手光波切不動古墳も墳裾が二次的に削平されており、現状の地形から直径約二五mの円墳と把握されている。

以上のように、宮地嶽古墳と手光波切不動古墳は、横穴式石室内部や墳形・墳裾の改変といった二次的に消失した情報は多い。しかし、横口式石槨に系譜をもつ横穴式石室の存在は確実であり、九州島内の稀少な事例と評価できる。新宮町相島からの石材輸送をふくむ造墓労力をふまえても、両古墳が後の宗形郡内における上位首長墓であったと位置づけられ、その被葬者は胸肩君であったと判断できる。宮地嶽古墳と手光波切不動古墳の存在は、宗像地域の特殊性、ひいては胸肩君の革新的側面を物語る考古資料と言えよう。



図五 宮地嶽古墳出土土器と石室



図六 手光波切不動古墳出土土器と石室

## (二) 宗像地域の後期前方後円墳

手光波切不動古墳の築造時期である七世紀前半は、西日本各地における前方後円墳の終焉時期と重なる(図四)。宗像地域の古墳時代首長墓については、池ノ上宏氏、宇野慎敏氏、重藤輝行氏、花田勝広氏、久住猛雄氏・宮元香織氏らの重厚な研究蓄積がある(池ノ上一九九八、宇野二〇一〇、重藤二〇一一、花田二〇一二、久住・宮元二〇一〇)。その成果に基づくと、古墳時代中期後半以降の津屋崎古墳群では、全長八〇m前後の前方後円墳が相次いで築造されており、九州北部を代表する大規模古墳群を形成したことが把握できる。

前方後円墳の築造は、前方後円墳集成一〇期まで継続しており、大石岡ノ谷2号墳や須多田下ノ口古墳、在自剣塚古墳等がその終焉的位置づけとなる。いずれの古墳も確実な時期決定資料を欠くが、小田編年ⅢB期(TK43型式期)の在自剣塚古墳出土須恵器等が数少ない論拠となる。ただし、釣川流域では、石室構造と出土土器から小田編年ⅢB期(TK43型式期)に位置づけられる相原E1号墳が存在しており、宗像地域での前方後円墳の存続が確実視できる(図七)。なお、相原古墳群内では、後続する首長墓の相原A2号墳(小田編年ⅣA期(TK209型式期))において円墳が採用されている(図七)。手光波切不動古墳の最新知見を加味しても、宗像地域での前方後円墳の終焉は小田編年ⅢB期ⅣA期(TK43型式期)~TK209型式期)のいずれかの時期に生じたと見通せる。

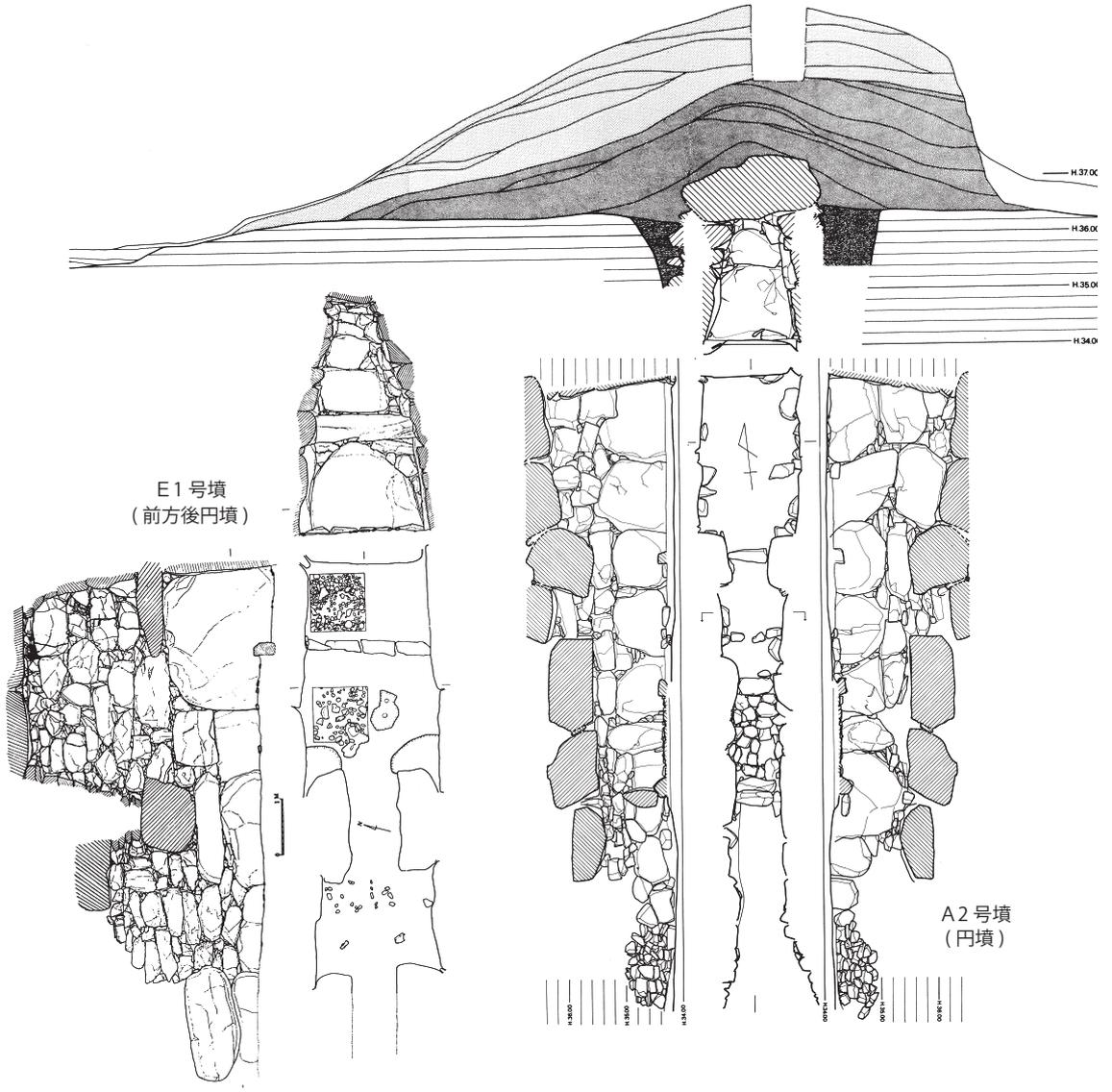
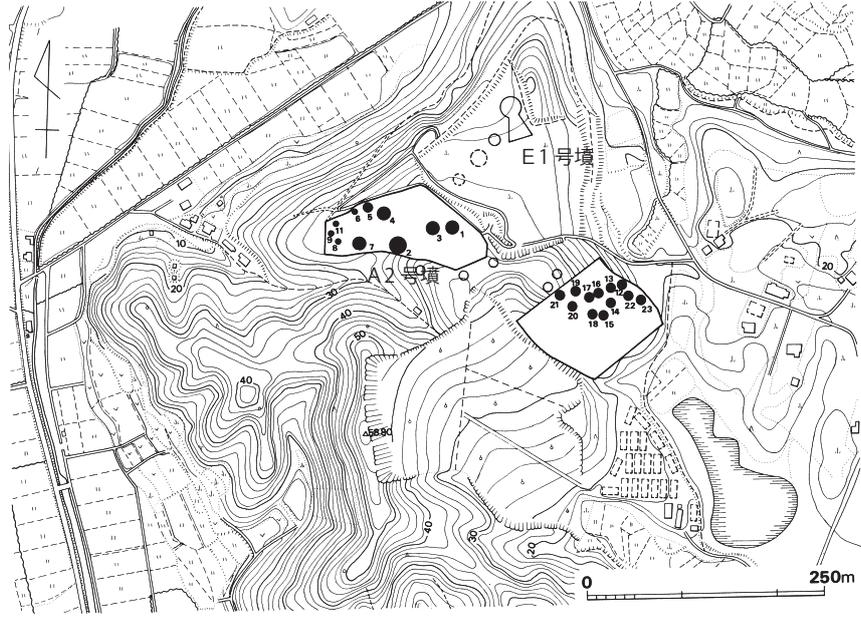
津屋崎古墳群に話を戻すと、最後の前方後円墳と目される在自剣塚古墳の墳長は約一〇二mを測り、当該期の九州における最大級の前方後円墳の

一つである。このことは、胸肩君が前方後円墳の造墓に多くの労働力を投入し、前方後円墳を頂点とする造墓秩序を脈々と維持していたことを意味する。今後の調査研究による造営年代のさらなる絞り込みが期待されるが、少なくとも、相原古墳群の事例から、宗像地域が西日本でも最も遅くまで前方後円墳が築かれていた地域の一つであったことは確実である。この現象は、胸肩君の保守的側面を物語る考古資料と評価できる。

## (三) 小結

宗像地域における前方後円墳の終焉は、「前方後円墳↓方墳」という大王墓の変遷に端を発するものであり、列島規模で連動するとの評価は揺るがない(下原二〇〇六・二〇〇九・二〇一六)。前方後円墳体制とも称される造墓秩序は、頂点に位置する大王墓の墳形変更により崩れた。前方後円墳築造停止後も大型古墳の築造は継続するが、方墳体制とも言うべき新たな造墓秩序が形成される(下原二〇〇六)。

宗像地域の特色は、前方後円墳体制から方墳体制への移行期において、旧来の前方後円墳築造を維持するとともに、石室系横口式石槨という新来の古墳構築技術も即座に導入するという二面性にある。以下では、胸肩君が前方後円墳の築造を維持する過程で、宗像地域の中心と周縁でどのような現象が生じていたかを検討する。



図七 相原古墳群 【石室 (S = 1/120)】

### 三、玄界灘沿岸域における前方後円墳の終焉

玄界灘沿岸域における前方後円墳の終焉については、下原幸裕氏による終末期古墳の研究や、重藤輝行氏の首長墓系列の研究、複数回におよぶ九州前方後円墳研究会での検討により、おおよその共通見解が醸成されている(下原二〇〇六・二〇〇九・二〇一六、重藤二〇〇九・二〇一一、久住・宮元二〇一〇)。その共通見解とは、「前方後円墳集成一〇期(六世紀後半～七世紀前半)には前方後円墳が存在しなくなる地域が多く、存在しても小規模化する場合が多い。ただし、宗像地域は例外的に一〇期の大型前方後円墳があり、糸島地域もこれに準じる可能性がある」というものであり、「古墳築造数が最も多い福岡平野では、大型前方後円墳の築造が相対的にはやく終焉している」ことも大勢として認められている。本稿では、このような前方後円墳の終焉に見られる地域差について、例外的と評される宗像地域(後の宗形郡・第I領域の範囲)の事例から検討する。

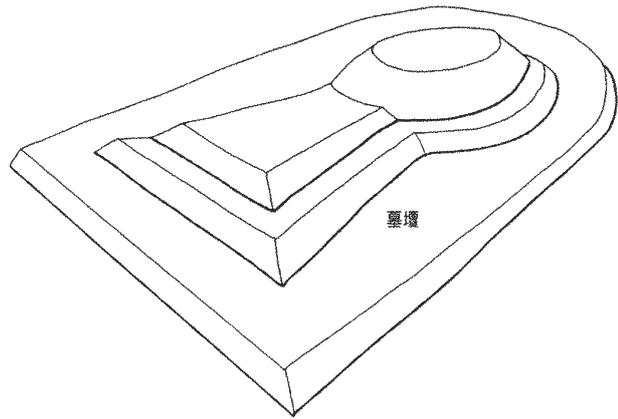
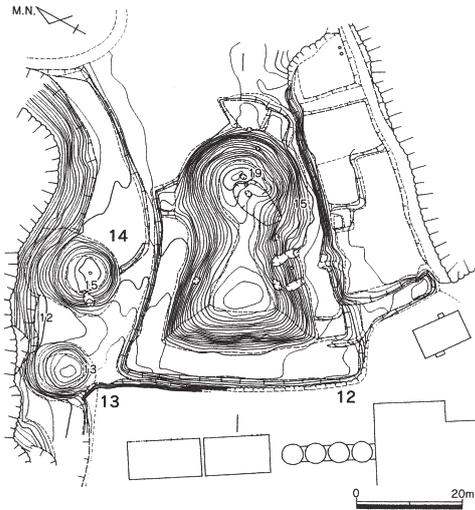
#### (一) 在自剣塚古墳の検討

宗像地域でも最も前方後円墳が集中する津屋崎古墳群の様相に着目する。津屋崎古墳群では、長年の分布調査・墳丘測量の成果に基づいて、前方後円形の墳丘の下層に盾形のテラス状施設「基壇」をもつ古墳が複数確認されている(図八)(池ノ上二〇一八)。池ノ上氏による基壇の指摘は重要で、勝浦峯ノ畑古墳、新原・奴山一二号墳、須多田ミソ塚古墳、在自剣塚古墳といった津屋崎古墳群内部の支群が異なる前方後円墳において、類

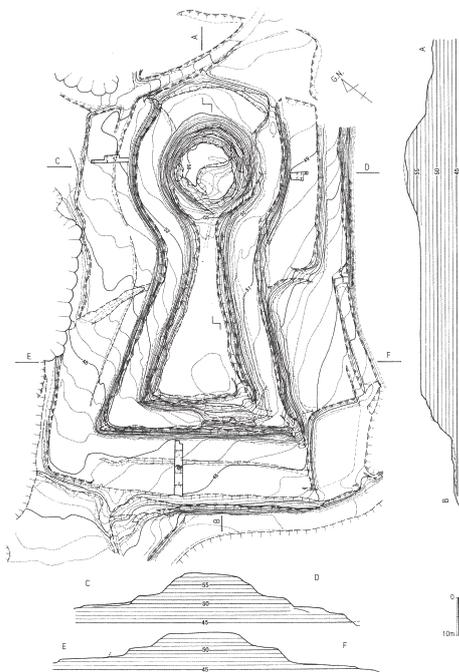
似した古墳構築技術・墳丘設計が用いられていたことが客観的に示された。この客観的事実は、津屋崎古墳群内に分散する前方後円墳を造営した集団の同一性を示す論拠の一つであり、さらには津屋崎古墳群の構成軸が同族墓群であるとの仮説を補強する<sup>(5)</sup>。

さて、この基壇は津屋崎古墳群最後の前方後円墳と目される在自剣塚古墳でも確認できる(図九)。基壇の大きさは、残存長で墳丘長軸約一一五m×墳丘幅軸約八七mを測り、現地表面からの標高差は約一～二mある。基壇の復元長は、尾根斜面上方との接続状況に検討の余地があるが、墳丘長軸約一三〇m×墳丘幅軸約九三mを測る。つまり、前方後円墳を側面から眺めれば、墳丘下部にある地山整形を主体とした「段差Ⅱ基壇」が視覚的な墳丘を構成しており、三段築成の前方後円墳と遜色ない景観となる(図九下段写真)。改めて、在自剣塚古墳を俯瞰してみると、本古墳は対馬見山から西にのびた尾根線上に立地しており、基壇も自然地形の高まりを巧みに取り込んで築かれている。いわゆる「山寄せ」の前方後円墳と評価できる。在自剣塚古墳で見られる「山寄せ」による墳丘構築作業の省力化は、汎列島的に見られる現象であるが、その一方で宗像地域の古墳構築技術からの評価も加えなければならない。

筆者が定義する宗像型石室では、深い墓坑内に横穴式石室を構築することで危険な天井石の引き上げ・架構作業を省力化する技術的特徴がある。この特徴は墳丘盛土とも関連しており、宗像型石室では墳丘盛土は「後載せ」に近く、壁体の構築・維持と墳丘盛土の関係性は相対的に低い(図二七)<sup>(6)</sup>。さらには、周溝掘削による盛土の確保は、より純粋に墳丘規模と



図八 新原・奴山 12 号墳と「基壇」模式図  
(池ノ上 2018)



国土地理院撮影の空中写真 (1974 - 78 年撮影)



空中写真の土地利用状況からも明らかなように、「基壇」の上に前方後円墳が築かれている。側面あるいは海側から眺めると、基壇の段差で三段築成墳のように視認できる。

図九 在自剣塚古墳 (墳丘測量図・空中写真・墳丘南東側の側面写真)

相関する。このように、宗像型石室の着眼点は、単なる石組みや墓坑の深さといった形態的特徴ではなく、むしろ、古墳構築全体の作業工程や作業空間を研究射程の念頭に置いたものである。

このような特徴をもつ宗像型石室を採用した古墳は、明確な周溝自体が存在しない、またはゆるやかな周溝、部分的な周溝をもつという事例が大半を占める。その景観は自然地形から漸移的に墳丘に接続することで、盛土範囲以上に墳丘を大きく見せる視覚的効果も生み出している。つまり、宗像地域では、「山寄せ」による墳丘構築技術が通時的に培われており、その技術が大型前方後円墳の基壇とも通じていると判断できる。

## (二) 船原古墳の検討

次に、宗像地域の中心である津屋崎古墳群を離れ、宗像地域の外縁の事例に着目する。古賀市所在の船原古墳（旧・船原3号墳）は、近年の発掘調査により、前方後円墳であることが明らかにされた（森下・甲斐二〇一六）。本古墳は、すでに正式報告がなされている石室や出土須恵器から、小田ⅣA期（TK209型式期）の前方後円墳と判断できる。この船原古墳が古代・宗形郡の範囲、拙稿の第Ⅰ領域に属していることは上述したとおりであり、宗像地域外縁における前方後円墳の終焉の様相を検討できる。

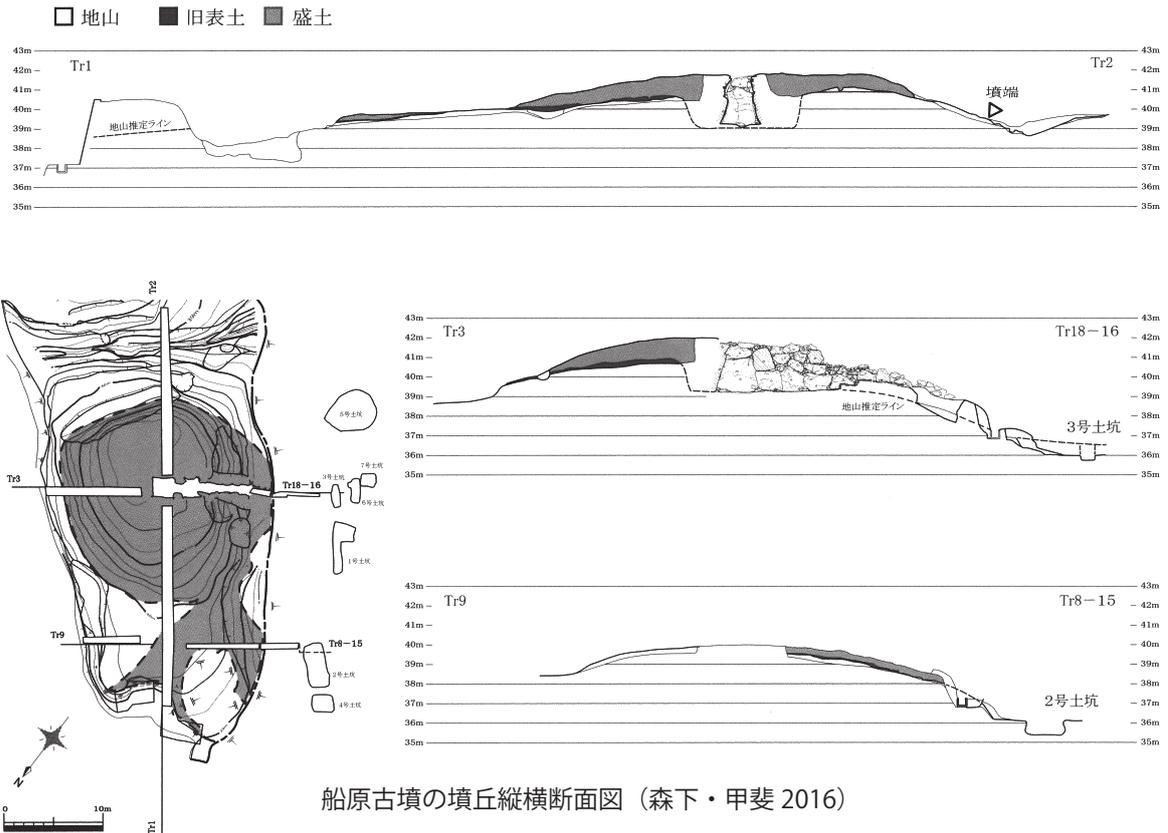
船原古墳は、三郡山系に連なる鋤先山から東にのびた尾根線上に立地している（図一〇）。現在、古墳北側が造成土により盛土されているが、一九七〇年代の国土地理院空撮を見ると北側にも田畑が広がる。船原古墳群がある尾根は、田畑に囲まれた舌状低丘陵となっており、微高地の頂部に

墳丘が立地していることが分かる。そして、船原古墳を一躍著名にした埋納土坑群は、舌状低丘陵の裾で発見された。

古墳本体（盛土範囲や石室）と埋納土坑群の間には、約6mの距離と約2mの段差がある。この距離感から発見当初より両者の有機的関係が疑問視されてきたが、墳丘出土須恵器片と二号土坑墓出土須恵器片の接合が確認されたことで、客観的に両者の関係が実証された（森下・甲斐二〇一六）。この事実は、古墳本体と埋納土坑との間にある段差も古墳を構成する要素であったことを意味する。すなわち、船原古墳は盛土墳丘とその下部にある段（段差約2m）が組み合った構造物と把握できる。集落があると見られる谷側や後の古代官道側から眺めたとき、船原古墳の墳丘は低丘陵の段差と組み合うことで、盛土範囲以上に大きく視認できる。墳丘から離れた段の裾に土坑群を掘削し、多くの埋納品を納めた人々も同様の認識をしていたと考えられる。

## (三) 「宗像」から眺めた船原古墳

船原古墳には在自剣塚古墳等の津屋崎古墳群で見られた「段差」が内包されており、両者に共通する要素を抽出することができる。他に「宗像」と共通する要素を探すと、報告書等でも述べられている前方部の低さが挙げられる（森下・甲斐二〇一六、岩橋・甲斐・森下二〇一七）。森下靖士氏・甲斐孝司氏によると、「前方部が発達しない六世紀後半代以降の前方後円墳は、近隣の宗像と筑紫・福岡市早良区・糸島にかけて比較的確認できる。特に、宗像では宗像君の首長墳以外の前方後円墳に多く、装飾古墳として



官道側から眺めた船原古墳 (写真中央)

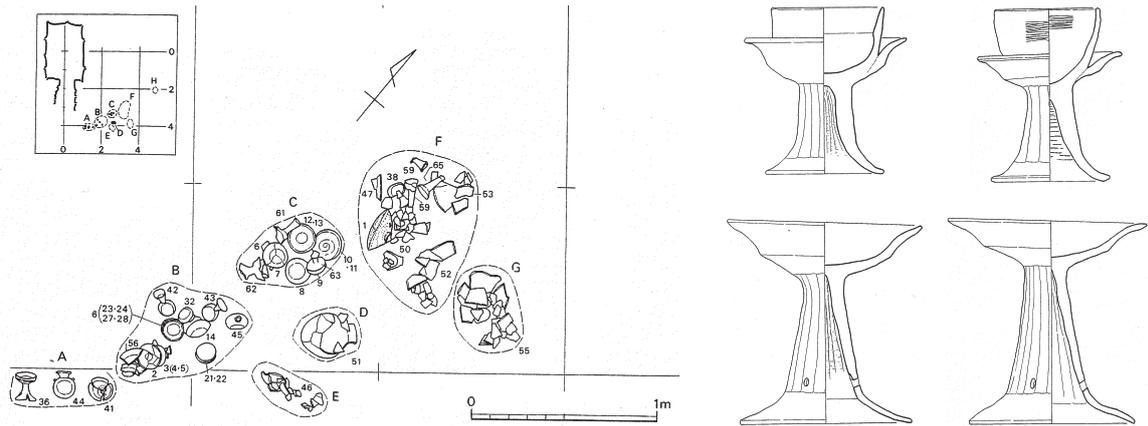
圃場整備により旧地形は失われているが、船原古墳の墳丘が舌状低丘陵(囲み部分)と一体化して築かれていることが分かる。丘陵端部の地山整形の情報も失われているが、築造当時は二段築成墳のように見えたであろう。写真左側は1970年代以降の造成で、盛土されている。



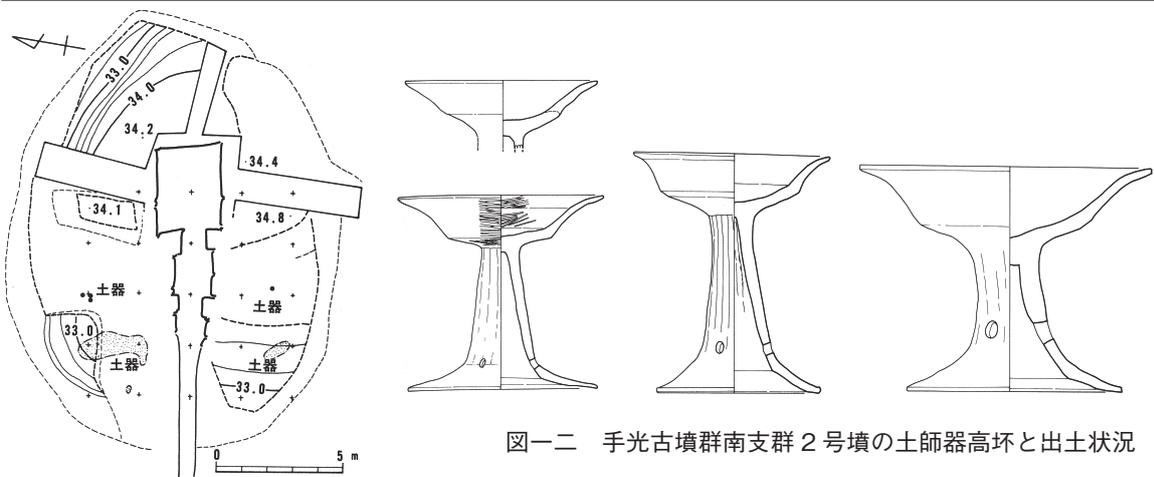
1970年代の船原古墳の周辺環境

国土地理院撮影の空中写真(1974-1978年撮影)で眺めた船原古墳の周辺環境である。写真右下(南東)から写真左上(北西)にのびた尾根・舌状低丘陵の先端頂部に船原古墳(○部分)が立地していることが分かる。

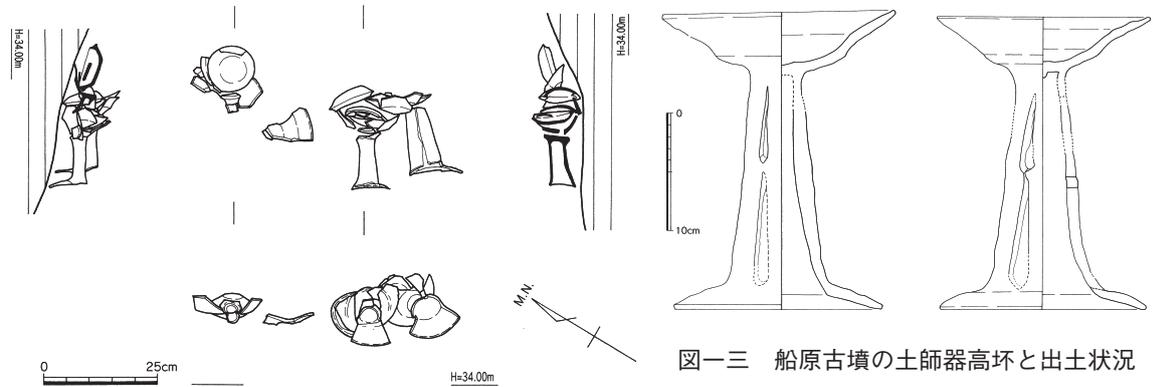
図一〇 船原古墳(墳丘断面図・墳丘遠望写真・空中写真)



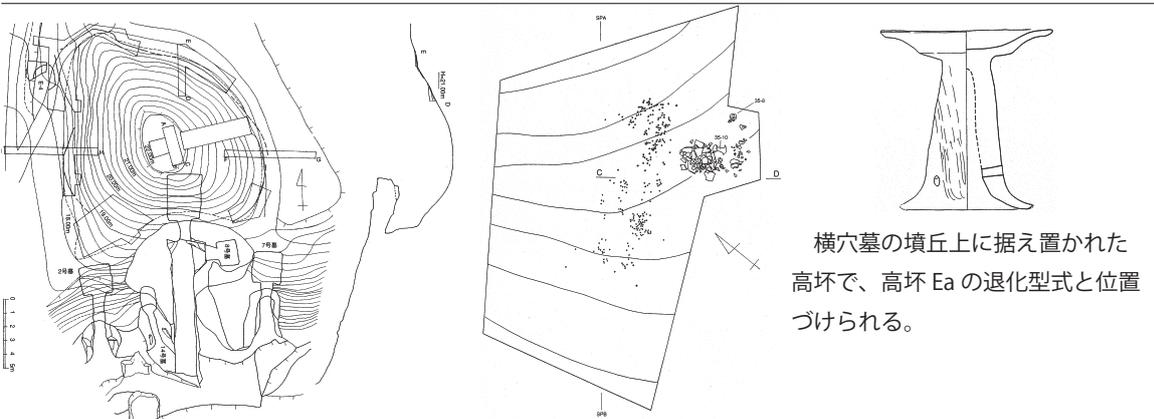
図一 新原・奴山5号墳の土師器高坏と出土状況



図二 手光古墳群南支群2号墳の土師器高坏と出土状況



図三 船原古墳の土師器高坏と出土状況



横穴墓の墳丘上に据え置かれた高坏で、高坏Eaの退化型式と位置づけられる。

図四 古月横穴の土師器高坏と出土状況

著名な桜京古墳をはじめ、大石岡ノ谷一号墳、大石岡ノ谷二号墳、相原E1号墳など管見するだけでも八例ある」(森下・甲斐二〇一六)。宗像は当然、宗像型石室の中心分布域(第I領域)であるが、福岡市早良区、糸島という範囲は、宗像地域外でも例外的に宗像型石室が色濃い範囲(第III領域の一部)であり、両者の分布域は重複する(小嶋二〇一二・二〇一七b)。

加えて、埋納土坑出土須恵器に含まれる脚付甕や、墳丘くびれ部から出土する折衷型の土師器高坏Eaも共通要素として挙げられる(小嶋二〇一二)。とくに、土師器高坏Eaは「宗像型土師器高坏」と呼んでも差し支えないほどの際立った器であり、全出土品の約八割が墳丘・周溝出土という点から墳丘祭祀との関わりが強く認められる土器である(図一一〜一四)。さらに、船原古墳では土師器高坏の上に須恵器坏を重ねた状態が確認でき、供献時の土器配列においても新原・奴山古墳群等との類似性は極めて高い。大規模な盗掘を受けているため、消極的な評価となるが、主体部内からの土器出土がない点にも類似点が認められる(小嶋二〇一二)。以上を総括すると、津屋崎古墳群と船原古墳は、古墳構築技術と葬送儀礼の双方において、共通要素を見出すことができる。

その一方で、船原古墳には津屋崎古墳群とは異なる要素も複数存在する。まず、主体部の横穴式石室が典型的な宗像型石室ではない。巨石墳となるため判断が難しいが、墓坑の範囲が広く、基底石を据える作業空間が宗像型石室と異なる。墓坑の深さも、腰石の巨石化に伴う技術上の時系列変化としても把握できる(津曲二〇〇四)。石積みや空間設計の総体をふまえれば、福岡平野側の横穴式石室(筑紫型石室)、あるいは排水溝の存

在もふまえ豊前地域の横穴式石室(筑豊型石室・豊前型石室、橋塚タイプ)との関わりも注視しなければならない(朝岡二〇一三・田村一九九九・小嶋二〇一五)①。また、先に挙げた脚付甕は宗像との共通要素であるが、須恵器総体として見た場合は、宗像窯跡群の供給のみでは完結しない。船原古墳が属する花鶴川流域は、宗像窯跡群と牛頸窯跡群に挟まれた中間地域として存在しており、双方の製品が流通している(田尻・石川二〇〇八)。このような点において、古代宗形郡の領域内であっても、津屋崎沿岸・釣川流域と花鶴川流域では、物流面で大きな違いが認められる。いずれにせよ、船原古墳は「宗像」の要素のみでは構成されていない。土師器高坏Eaを須恵器高坏(長脚二段透)と折衷させる点が象徴的に示すように、中央・地方・諸外国の複数の要素を組み合わせて、独自の古墳構築と葬送儀礼を成立させていると判断できる(図一一〜一四)。

#### (四) 小結

上記では、大型前方後円墳が継続する宗像地域(後の宗形郡・第I領域の範囲)を対象に、その中心と外縁の事例を検討した。その過程で、池ノ上氏が呼称する「基壇」、あるいは墳丘基盤にある「段差」の存在に着目し、墳丘構築技術や視覚的認識の共通性を指摘した。

玄界灘沿岸域における前方後円墳集成一〇期(六世紀後半〜七世紀前半)の前方後円墳は、宗像地域(宗像市・福津市・古賀市・新宮町)と糸島地域(糸島市・福岡市西区)に分布しており、津屋崎古墳群では在自剣塚古墳のような墳丘一〇〇mを超える大型前方後円墳も含まれている。そして、

前方後円墳の分布範囲は宗像型石室の分布域、墓域での土師器高坏Eaの出土分布域とも大部分で重複する。以上をふまえると、前方後円墳集成一〇期の玄灘沿岸域における前方後円墳の維持と分布には、胸肩君という『中心』が存在すると結論できる。

#### 四、胸肩君の古墳造営

##### (一) 胸肩君の小造墓秩序圏

下原幸裕氏が実証したように、西日本における前方後円墳の終焉は、中央(大王墓)と地方(豪族)の関係を基に、広域での連動が認められる(下原二〇〇六・二〇〇九・二〇一六)。その結論は、都出比呂志氏が提唱した「前方後円墳体制」とも整合しており、ヤマト政権が築いた造墓秩序が日本列島の広域で機能していたことを物語る(都出一九九一)。本稿では、この広域での造墓秩序に内包される前方後円墳終焉の地域差に着目し、玄灘沿岸域での地域差を生じさせた要因の一つに胸肩君の存在があると結論づけた。

津屋崎古墳群は古墳時代中期から造墓活動を活発化させ、古墳時代後期には宗像地域を中心に玄灘沿岸で、類似した古墳構築技術と葬送儀礼を拡散した(図一・四)。その分布域は一過性のもではなく、継続的に維持されており、何らかの基本構造が存在する。つまり、ヤマト政権が築いた大造墓秩序圏の内部に、胸肩君が築いた小造墓秩序圏(小前方後円墳体制)が存在したと考える。この小造墓秩序圏の中心軸は「胸肩君・胸肩部」

であるが、同一地域内に居住する他豪族(胸肩君と従属関係にない豪族)の造墓活動にも影響を与えている。その影響とは、具体的には造墓行為における相互協力関係(技術者・労働者の派遣)や豪族間の対抗意識によって生じたと考えられる。上記で検討した船原古墳に葬られた豪族も、考古資料から抽出できる共通要素から、胸肩君と無関係に存在していたとは考え難い。本稿で提示した小造墓秩序圏とは、主従関係の範囲を超えたところでも機能する部分がある。日本列島の古墳墓制とは、大造墓秩序圏の内部に形成された小造墓秩序圏の連なりと相互の重複、さらには九州北部で顕著な諸外国の造墓秩序圏との接触によって成立すると考えられる。

##### (二) 胸肩君による前方後円墳の維持

次に、胸肩君による前方後円墳の維持という根本的な問題を考える。この本質的な問いに答えるには、古墳そのものを意識的に捉え直す必要がある。

古墳は死者の埋葬を主目的とした構築物である。死者を「黄泉国に送る」には、人々が信じる適切な手順、すなわち正しい葬送儀礼をふまなければならない。考古学による発掘調査では、遺体や棺・副葬品・供献品がどのような場所に、どのような過程を経て安置されたのか等の痕跡を調べることで葬送儀礼を検討する。

宗像型石室を含むすべての九州北部の後期古墳を対象に葬送儀礼を検討すると、宗像地域の古墳には特異な痕跡を見出すことができる。その特異性とは、「石室内からほとんど土器が出土せず、墳丘上から多量の土器が出土する」点にある(小嶋二〇一二)。古墳時代中期の渡来文化の導入を

経て、日本列島の古墳文化にも、埋葬施設内における食料副葬・土器副葬が急速に普及し、古墳時代後期には普遍的に石室内から土器が出土する。このような広域的動態の中にあつて、宗像地域の古墳では、古墳時代前期（後期を通じて土器副葬が浸透しない。つまり、宗像地域の古墳では、横穴式石室という新来の墓制を積極的に導入し、改変していく一方で、古墳時代前期以来の伝統的な墳丘祭祀を踏襲し続ける状況にある。この葬送儀礼は宗像地域に居住していた集団、胸肩君が維持し続けてきた、遺体埋葬の適切な手段である。

胸肩君が継続した墳丘祭祀は、宗像型石室の構築方法とも思想面で関係する。宗像型石室は他地域と比べても遜色ない横穴式石室であるが、深い墓坑内部に石室を構築する特徴がある（釜瀬一九九六）。そもそも墳丘墓や前方後円墳は、墳丘頂部に掘削した墓坑内部で完結するように主体部を築き、遺体を埋葬した構造物であり、石室の構築と連動させて墳丘を築造する構造物ではなかった。宗像型石室は横穴式石室という新来墓制に対応しているが、墓坑内部に石室を築くという点において、技術面だけでなく、思想面でも連続性が認められる。つまり、墳丘祭祀のみが堅穴系埋葬施設と連続性をもつというのではなく、石室構造も含めた複合的な連続性を有する。

このような古墳時代後期における墳丘祭祀を象徴する土器が、土師器高杯 E a である（重藤二〇〇九、小嶋二〇一二）。宗像地域で用いられた土師器高杯 E a は長い脚部をもち、裾に小さな円形透孔が三方向に穿たれている。そして、器面は光沢をもつほどの丁寧なミガキ調整を施す。この三方向の円

形透孔と緻密なミガキ調整を組み合わせたデザインは、古墳時代前期の日本列島でひろく採用されていたデザインとなる。古墳時代中期には廃れてしまふデザインだが、宗像地域のみは古墳時代後期において、旧来のデザインを復古的に採用して増産する。この「復古調デザイン」となる土師器高杯は現在までに一一〇点を確認しているが、その約八割が古墳の墳丘上から出土しており、墳丘祭祀と強い相関関係が認められる（図一一～一四）。

復古調デザインの高杯を用いた墳丘祭祀は、今日の感覚から見ると「意図的な伝統の創出」に近い印象を受ける。いずれにせよ、宗像三女神を奉るための正しい神まつりの所作と同様に、首長を葬る際の正しい葬送儀礼を確立していたことは確かである。つまり、胸肩君にとっての前方後円墳は、権威の象徴であり続けるとともに、墳丘祭祀を構成する舞台としても機能し続けたと結論できる。前方後円墳終焉の地域差を生じさせた要因は、古墳時代豪族を形づくった社会構造とともに、各豪族の個別的な事情も組み合っていると考えられる。

### （三）文献史料から眺めた造墓動員

最後に文献史料を基に造墓動員の実態を検討することで、胸肩君の古墳造営の具体像についての見通しを述べる。終末期古墳と呼ばれる飛鳥時代の古墳造営は、考古資料に基づいて実態説明が図られている他、文献史料からもその具体像を窺うことができる。

適是時、蘇我氏諸族等悉集、爲嶋大臣造墓而次于墓所。爰、摩理勢臣壞墓所之廬、退蘇我田家而不仕。

〔『日本書紀』卷第二十三、舒明天皇即位前紀〕

又盡發舉國之民、并百八十部曲、預造雙墓於今來。一曰大陵、爲大臣墓。一曰小陵、爲入鹿臣墓。望死之後、勿使勞人。更悉聚上宮乳部之民、乳部、此云美父。役使埜堯所。

〔『日本書紀』卷第二十四、皇極天皇元年〕

上記に挙げた二つの記事は、方墳体制の構築に深く関与した蘇我氏の造墓動員の実態を探れる史料である。まず、舒明天皇即位前紀の造墓記事であるが、嶋大臣（蘇我馬子）の生前墓を築くために、蘇我一族が集結し、古墳の近くに宿宮していることがうかがえる。また、「墓所之廬」とあることから、簡易的な小屋での宿宮が認められる。次の皇極天皇元年の造營記事では、古墳造營に際して「国中の百八十にあまる部曲を動員」し、さらには「太子の養育料として定められた部民を、すべて集めて墓の工事に使った」ことが分かる。当然ながら、本記事は蘇我氏の専横を非難するために記されたものであり、すべての記載を史実と直結して考えることはできない。しかし、専横非難を差し引いても、蘇我氏の造墓動員が「①血縁集団（蘇我氏）と②部曲（蘇我氏への服属集団）」が主体となっていることは認められよう。専横を象徴する事例として非難されているのは、皇族に服属している部民を動員した点にあり、直接的な主従関係にない部曲を動員することは、非社会的行為であったと判断できる。

このような部曲の帰属問題については、宗像に關係する記事が『日本書紀』に残されている。

五年春三月戊午朔、於筑紫所居三神、見于宮中、言「何奪我民矣、吾

今慚汝。」於是、禱而不祠。〔『日本書紀』卷第十二、履中天皇五年〕

冬十月甲寅朔甲子、葬皇妃。既而天皇、悔之不治神崇而亡皇妃、更求其咎、或者曰「車持君、行於筑紫國而悉校車持部、兼取充神者。必是罪矣。」天皇則喚車持君、以推問之、事既得實焉。因以、數之曰「爾雖車持君、縱檢校天子之百姓、罪一也。既分寄于神車持部、兼奪取之、罪二也。」則負惡解除・善解除而出於長渚崎令祓禊。既而詔之曰「自今以後、不得掌筑紫之車持部。」乃悉收以更分之、奉於三神。

〔『日本書紀』卷第十二、履中天皇五年〕

この二つの記事では、筑紫に派遣された車持君が「筑紫所居三神（宗像三女神）」に充てられていた「筑紫之車持部」を独断で掌握したことが非難されている。また、本事件の冒頭では、宮中に「筑紫所居三神」が現れ、「何奪我民矣、吾今慚汝。（なぜ我が民を奪うのか、今にお前に恥をかかせる。）」と発言する激しい抵抗が読み取れる。本記事は時間軸の問題に加えて、宗教的側面ももつ内容であるが、筑紫の人々とヤマト政権の間に生じた歴史的事象を反映している可能性は十分にある。少なくとも、胸肩君を含む飛鳥時代以前の豪族にとって、部曲の帰属は自らの存立基盤に関わる問題であったと考えられる。とくに血縁集団と部曲の多寡は、飛鳥時代以前の豪族が動員できる軍事力とも直結する。『日本書紀』記載の集団戦闘を網羅的に検討すると、兵の集結場所として各豪族が居住した「館」が選ばれており、兵の実態が血縁集団と部曲を軸に構成されていたことを示唆する（小嶋二〇一六a）。したがって、大化の薄葬令に代表される薄葬化（Ⅱ古墳造營の衰退）は、律令的身分制の施行を念頭に置いているが、よ

り切実な問題として軍事力の国家管理、すなわち豪族による部曲の私的動員の抑止とも関わっている。「動員」という視点から終末期古墳を眺めれば、大規模方墳・円墳と小規模方墳・円墳という古墳規模の二極化が表出しており、後期群集墳で見られた小首長墓や盟主墳と呼称される中規模古墳（前方後円墳・円墳）が最も早く終焉を迎えている。言い換えれば、「大人数でつくる古墳」と「少人数でつくる古墳」に分離し、造墓動員数が二極化したと言え、古墳時代の慣例的な私的動員の制限が反映されている。

胸肩君の古墳造営に話を戻すと、蘇我氏の古墳造営で見られた「血縁集団と部曲の動員」は、考古資料から抽出した「①古墳構築技術（宗像型石室）、②葬送儀礼（石室内の土器非副葬、土師器高坏Eaの使用を含む墳丘祭祀）」の分析結果（古墳時代後期・第I領域）の構造的モデルとして整合する（図一）。胸肩君による古墳造営での胸肩部の動員が、古墳構築技術と葬送儀礼が特定の集団（特定の範囲）に広まる直接要因となり、結果的に地理的分布域を形成する基本軸になったと考えられる。

では、血縁集団と部曲の動員のみで古墳造営が完遂されたかと言えば、それも実態から乖離した理解である。宗像地域の前方後円墳を事例に挙げれば、装飾壁画と石屋形をもつ桜京古墳、S字配置竹管文の埴輪をもつ須多田天降神社古墳等は、胸肩君と胸肩部で完結する古墳造営では説明ができない（小嶋二〇一三）。古墳時代後期の首長墓には積極的に他地域の技術が導入されており、豪族間の相互で一部の造墓動員が重複していることは確実である（小嶋二〇一八）。協力関係にある豪族の古墳造営に、各自の部曲を派遣する場合もあったと考えられる。また、主従関係や血縁関

係自体が重複する場合も想定できる。筑紫の豪族を例に挙げると、日羅の父として著名な「葦北国造刑部鞞部阿利斯登」は、火葦北の国造であるとともに、刑部（皇族の名代）・鞞部（大伴氏所管の部民）に属している。また、筑紫火君は筑紫君と火君の複姓氏族であり、その存立基盤（部曲等）についても双方と関係を有していたと考えられる。時間差もある、わずかな文字史料を拾い上げても、飛鳥時代以前の血縁集団・服属集団の範囲は重層的な様相を呈していたことが推測できる。

以上、考古資料での情報抽出が難しい造墓動員の実態について、文献史料を中心に検討した。文字量が少ない史料から抽出した情報は、多分に理念的な結論へと陥りやすい。しかし、考古学と文献史学の相互検証は、より生々しく実態に即した歴史像を結ぶ適切な手段である。

## おわりに

「前方後円墳の終焉」という現象から、胸肩君のさらなる実態解明を図った。前方後円墳終焉の地域差、宗像地域を中心とする前方後円墳造営の維持に対し、胸肩君を核とする小造墓秩序圏の存在を想定した。大局的視点から眺めると、前方後円墳の終焉は広域で連動しており、「中央・地方」構造は間違いなく存在する。この点をふまえた上で、本稿では「中央・地方」構造の内部にある、「地方・地方」構造に着目した。その事例の一つとして取り上げた船原古墳については、墳丘と埋納土坑群の間に見られる「段差」について、津屋崎古墳群の「基壇」から説明した。裏を返せば、津屋

崎古墳群の「基壇」においても、その裾や外縁域での調査に問題意識をもつておく必要がある。この検討結果の可否は、後の検証に委ねるが、船原古墳を構成する要素の一つに「宗像」が存在することは間違いない。

本稿では「地域性」という単語を意図的に用いなかった。地域性という単語は「何らかの要因で生じた現象」を指すものであり、物質資料を基にヒトを研究する考古学において、あくまで研究過程で用いるべき単語と考えている。地域性の抽出という結論で思考停止するのではなく、地域性を生じさせた要因を追究することがヒトの研究に求められる。

(九州国立博物館)

## 註

(1) 『古事記』・『日本書紀』が成立した奈良時代の理解である。『日本書紀』では、他に水沼君の名も記されており、胸肩君のみが三女神を奉っていたわけではない。

(2) 「大宝二年筑前国嶋郡川辺里戸籍」の宗形部宿奈売・宗形部阿比太売は、婚姻による移住事例である。

(3) 墳裾が削平された古墳の墳形把握は慎重を要する。とくに大型の終末期古墳は注意が必要である。福岡市所在の金武乙石一・二号墳では、発掘調査により方形周溝が確認されたことで、方墳であることが判明した。

(4) 井浦一氏の研究成果によると、手光波切不動古墳では、凹みを有する仕切石を玄室に設ける点において、九州の石室構造の系譜も内在している(井浦二〇一三)。

(5) 津屋崎古墳群は、「突出した規模の大型古墳を築く、造墓労力を集約した古墳づくり」ではなく、「複数の古墳を同時併行で築く、造墓労力を分散した古墳づくり」をしている点に特徴があり、宗像君が複数系列の同族集団で構成されていたことを物語る。また、大型古墳が特定の墓域に集中せず、複数の墓域に分散する状況は、宗像君の族長が特定系列から輩出されるのではなく、各世代の有力者が族長に就く集団構成を反映している可能性がある(小嶋二〇一六b・二〇一七a)

(6) 宗像型石室の極端な事例では天井石付近まで墓坑内におさまるが、壁面の半程度しかおさまらない事例もある。しかし、この場合も壁体の構造的維持、石組作業空間や天井石の引き上げといった諸要素が他集団の石室類型(範型)と根本的に異なる(小嶋二〇一七b)。やはり、技術基盤は宗像型石室にあり、宗像型石室の独自の改良や基盤層の違いに応じた臨機の変更に範疇で捉えられる。筆者が設定する石室類型(範型)とは、造墓動員された人々が現場で体得した技術体系(行動様式)であり、自然条件(入手石材の質・大きさ、造墓地の地質等)や技術条件(技術の習熟度、独自改良、動員人数等)により、生産物である古墳の形質的特徴は決して一定にはならない。宗像型石室という類型抽出の意義は、このような変異を認めながら、各古墳を築造した人々で共通する技術基盤が時空間的にどのように存在したのかを模索できる点にある。

(7) 宗像市の相原A二号墳も、船原古墳との比較対象として重要である(図七)。相原A二号墳は墳丘構築等に宗像型石室の要素を残すが、基底石の据え方が著しく変容(畿内系技術を組み込んだ筑紫型と折衷)しており、宗像型石室

の範疇のみでは捉えられない。

## 参考文献

- 朝岡俊也 二〇一三 「横穴系埋葬施設の排水溝・豊前地域」『福岡大学考古学論集2』福岡大学考古学研究室
- 井浦一 二〇一三 『津屋崎古墳群Ⅲ』福津市文化財調査報告書第七集 福津市教育委員会
- 井浦一・石橋英巳・森康 二〇一五 「福岡県津屋崎古墳群に用いられた玄武岩石材の供給地」『九州考古学』第九〇号 九州考古学会
- 井浦一 二〇一七 「胸肩君の領域」『季刊邪馬台国』一三二号
- 池ノ上宏 一九九八 「宗像における前方後円墳の終焉」『前方後円墳の終焉』第四三回埋蔵文化財研究集
- 池ノ上宏 二〇一八 「胸形君の古墳と新原・奴山古墳群」『考古学ジャーナル』No. 七〇七 ニューサイエンス社
- 岩橋由季・甲斐孝司・森下靖士 二〇一七 「福岡県古賀市船原古墳の調査について」『日本考古学』四三号 日本考古学協会
- 筈瀬明宏 一九九六 「古墳墓壙構築の歴史的意義・筑前地域を中心に」『福岡大学大学院論集』二八巻二号 福岡大学大学院論集刊行会
- 宇野慎敏 二〇一〇 「沖ノ島と北部九州における首長層の動向」『古文化談叢』六三集 九州古文化研究会
- 大高広和 二〇一七 「古代宗像郡郷名駅名考証(三)」『沖ノ島研究』第三号「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 亀井輝一郎 一九九九 a 「ヤマト王権と宗像」『宗像市史』通史編第二卷 宗像市
- 亀井輝一郎 一九九九 b 「律令時代の宗像」『津屋崎町史』通史編 津屋崎町
- 亀井輝一郎 二〇一〇 「古代の宗像氏と宗像信仰」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- 木下良 一九九九 「律令制下における宗像郡と交通」『宗像市史』通史編第二卷 宗像市
- 久住猛雄・宮元香織 二〇一〇 「筑前地方における首長系列の再検討」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 二〇〇九 「筑前後の後・終末期古墳」『終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 二〇一二 「墓制と領域・胸肩君一族の足跡」『九州歴史資料館研究論集』三七号 九州歴史資料館
- 小嶋篤 二〇一三 「IV群系埴輪の研究・肥後南部型埴輪と嘉穂型埴輪」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 二〇一五 「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流Ⅲ』九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 二〇一六 a 「大宰府の軍備に関する考古学的研究」平成二五〜二七年度科学研究費補助金若手研究(B) 研究成果報告書(課題番号:25770290) 九州国立博物館・福岡県立アジア文化交流センター
- 小嶋篤 二〇一六 b 「宗像君と海の道」『九州の海と島々』九州の海と島の歴史研究会
- 小嶋篤 二〇一七 a 「歴史をつなぐ海原」『特別展 宗像・沖ノ島と大和朝廷』九州

国立博物館

小嶋篤 二〇一七b 「糸島型石室と玄界灘沿岸の古墳づくり」『七隈史学会第一九  
回大会研究発表報告集』七隈史学会

小嶋篤 二〇一八 「嘉穂型埴輪の研究」『埴輪論叢』第八号 埴輪検討会

重藤輝行 二〇〇九 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考

古学』佐田茂先生論文集刊行会

重藤輝行 二〇一一 「宗像地域における古墳時代首長の対外交渉と沖ノ島祭祀」

『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産

推進会議

篠川賢 二〇一三 「古代宗像氏の民族的展開」『宗像・沖ノ島と関連遺産群研究報

告Ⅲ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議

下原幸裕 二〇〇六 『西日本の終末期古墳』中国書店

下原幸裕 二〇〇九 「終末期古墳の諸問題」『終末期古墳の再検討』九州前方後円

墳研究会

下原幸裕 二〇一六 『古墳時代墓制の終焉過程からみた律令国家形成期の北部九

州』平成二四～二六年度科学研究費補助金若手研究（B）研究成果報告書（課題

番号・24720370）九州歴史資料館

田尻義了・石川建 二〇〇八 「ヘラ記号から見た須恵器の流通範囲」『牛頸窯跡群』

大野城市文化財調査報告書第七七集 大野城市教育委員会

田村悟 一九九九 「六・七世紀における大型横穴式石室の地域性」『九州における

横穴式石室の導入と展開』九州前方後円墳研究会

都出比呂志 一九九一 「日本古代国家形成論序説・前方後円墳体制論の提唱」

『日本史研究』三四三 日本史研究会

津曲大祐 二〇〇四 「博多湾沿岸地域の石室構築技術・後期古墳を中心に」『福  
岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会

花田勝広 一九九一 「筑紫宗像氏と首長権」『地域相研究』第二〇号 地域相研究会

花田勝広 二〇一二 「宗像地域の古墳群と沖ノ島祭祀の変遷」『沖ノ島祭祀と九州

諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会

福原栄太郎 一九九九 「律令制の展開と宗像」『宗像市史』通史編第二卷 宗像市

森下靖士・甲斐孝司 二〇一六 『船原古墳Ⅰ』古賀市文化財調査報告書第六八集

古賀市教育委員会

